

原 著

「開発」と「貧困」の視点から持続可能な社会の形成を目指す

公民科教育の単元開発研究

桑原敏典（岡山大学大学院教育学研究科）

本研究は、高等学校公民科において、「開発」と「貧困」の問題を取り上げ、持続可能な社会の形成を目指し、それを支える市民の育成を目標とする単元を開発しようとするものである。「開発」と「貧困」の問題は、従来から公民科においても取り上げられている。しかしながら、その学習は問題の表面的な理解にとどまり、他国の立場も理解し自らもできることを見つけて取り組もうというスローガンの提示で終わることが多いように思われる。本研究においては、持続可能な社会という観点から「開発」と「貧困」の問題を捉えなおし、それを支える社会の仕組みやシステムをも認識させる単元の開発を目指した。

キーワード：公民科、単元開発、持続可能な社会、開発、貧困

I. はじめに

本研究は、以下の三つの課題に応えようとするものである。第一は、持続可能な社会とはどのようなものであり、それはなぜ実現されなければならないのか。第二は、持続可能な社会を実現するために、「開発」は「貧困」の問題とどのように関わるのか、あるいは関わらないのかということである。そして、第三は、上記の二つの課題に公民科教育を通して応えていくなれば、どのように取り組んでいくべきかということである。本研究では、これらについて、持続可能な社会を作り上げるためにはシステムの転換が必要であることを主張し、具体的には、既存のシステムを吟味し持続可能な社会を形成する制度や仕組みを考えさせる公民の単元開発の原理と方法を提示していきたい。

持続可能な社会とは、将来の世代が、今の世代と同様の幸福を享受できることを保障し得る社会のことである。かつて、開発すべき土地がまだまだ残されており、消費できる資源が大量にあった時代には、便利さと快適さをどんなに追求しても、致命的な打撃を与えさえしなければ、その状態が持続し得ないものであるとは考えられなかった。しかし、現在は、我々が日常生活の中でごく普通の幸せを享受することが、少しずつ地球に回復不可能な打撃を与え将来そのような幸せを受けることができなくなる時代をもたらすことが明らかとなっている。ゴミを捨てること、自動車に乗って旅行に出ること、レストラン

で食事をするといったごく日常の行動が、持続し得ない社会を生むのである。つまり、持続可能な社会を実現するためには、我々の生活の仕方を見直すこと、生活の基盤となっている社会のシステムを見直すこと、そして、そのシステムの基盤となっている我々の考え方を問い直すことを避けては通れないのである。

このように考えると、開発によって幸せを求めてきた従来の考え方は否定され、開発は望ましくないものと考えがちである。確かに、開発が我々の生活を便利にして、必ず幸福をもたらしてくれるとは言えない状況が見られるようになった。しかし、開発なくしては全ての人が同じレベルの幸福を享受できないのも事実であろう。さもなければ貧困に甘んじなければならないのである。開発を進め、貧困を解消し、そのうえで持続可能な社会を形成していくことが求められていると言える。このことは、従来のように開発を市場の原理にまかせ、各自が効率性を追求していけば資源の適正な配分がなされるということに立ち帰っていくということではない。なぜなら、持続可能な社会において資源を配分すべきは、今の社会に生きている人間だけではないからである。将来の世代にも適正に資源を配分し得るような新たなシステム作りが求められているのである。

公民教育が、持続可能な社会の形成という要請に応えるためには、このようなシステムとそれを支える思想の転換を捉えさせるということである。そし

て、そのような社会を支える市民としての資質を身に付けさせなければならない。本研究においては、経済発展と環境保護をめぐる先進国と発展途上国の問題を取り上げながら、貧困をなくし持続可能な社会を形成するための開発を進めていく国際社会のシステムを考えさせていく公民科単元の開発を通して、冒頭で述べた本研究の三つの課題に応えていきたい。

Ⅱ. 現在の公民科教育における「開発」と「貧困」の取り扱いと問題点

現在、公民科教育において「開発」と「貧困」が取り上げられるのは、「現代社会」と「政治・経済」である。「現代社会」では、内容(1)「現代に生きる私たちの課題」、内容(2)ーイ「現代の経済社会と経済活動の在り方」、内容(2)ーエ「国際社会の動向と日本の果たすべき役割」の中で取り上げることができよう。また、「政治・経済」では、内容(2)「現代の経済」のイ「国民経済と国際経済」や、内容(3)「現代社会の諸課題」のイ「国際社会の政治や経済の諸課題」で、取り上げられるはずである。

現在の公民科教育における、「開発」と「貧困」の問題の取り扱い方については、次の4点の問題を指摘することができる。

- ① 生徒にとって遠い国の問題としての「開発」と「貧困」
- ② 経済的な問題に焦点化された取扱い
- ③ それぞれの言葉に付きまとう固定化されたイメージ
- ④ 背後にある社会の仕組みやあり方が見えないこと

①は、「開発」と「貧困」が専ら発展途上国の経済上の問題として取り扱われることによる。そのため、深刻な問題であることは理解できても、飽くまで自分たちの世界とは切り離された遠く離れた国の事象としか認識できないのである。②は、現状の公民科授業が重要とされる概念の解説にとどまり、それらを構造化して現実の社会の出来事と関連付けて教授するものとなっていないことに起因する。そのため、授業は事項の羅列にとどまり、経済領域に分類される事柄については、飽くまで経済問題としてのみ取り上げられ、背後にある政治の在り方や社会関係が考察されないのである。③は、「開発」と「貧困」という言葉に対して生徒だけではなく教師も持っているイメージが、これらの問題について冷静かつ合理的に判断・思考することを妨げているのではないか

ということである。そのイメージとは、「開発」は悪であり、「貧困」を解消に対しては長期的に見れば無駄であり、一部の階層に利益をもたらすのみであるというものである。したがって、「開発」の負の面のみが強調され、実際には「開発」によって現代社会は発展してきたことや、それなくしては現実的には「貧困」を解消しえないことなどが見落とされがちとなってしまうのである。④は、②の問題とも関連するが、「開発」と「貧困」をたんなる経済上の問題としてのみとらえ、その背景にある政治制度やシステム、社会的なつながり等の理解にまで深められていないということである。

以上のような問題点を克服し、生徒自身が「開発」と「貧困」の問題に関心を持ち、自らもその解決に向けて取り組もうとする意欲を育てるためには、これらを領域にとらわれることなく総合的に取り扱い、社会の構造やシステムと関連付け、わが国の社会の在り方と重ね合わせながら考察できるようにしていくことが必要であると考えられる。

Ⅲ. 「開発」と「貧困」のとらえ方

Ⅱで示した問題点を克服するために、本研究では「開発」と「貧困」を総合的に取り扱っていくことにしたいが、具体的には以下の4点のような視点から捉えていく。

- ① モノの「開発」ではなく、人の「開発」
- ② 「貧困」とは経済的な問題ではなく、政治、社会、文化といったあらゆる側面の問題を含む
- ③ 「貧困」は何かが不足していることではなく、機会や能力が奪われていること
- ④ 「開発」は、貧困によって奪われているものを取り戻すこと

①と②は、「開発」と「貧困」の概念を従来よりも広くとらえ直すことを意味している。その結果として、③、④のようにこれらの概念に新たな意味を付加していきたい。「貧困」は、経済に限らず人を取り巻く環境の問題であり、本来は手にすることができるはずのものが奪い取られている状況である。そして、「開発」は、そのような状況を解消し、本来の在り方を回復することである。そのため、ただ経済的な利益を配分することではなく、人が本来のもっている能力を発揮できるような状況を持続的に作り出すこととなる。

このように考えると、「貧困」は発展途上国だけの問題ではないことが分かる。経済的に恵まれていれ

ば、自分のもつ能力を発揮する機会と条件をそれだけ多く手にしている可能性は高いものの、経済的な豊かさは「貧困」解消の絶対的な条件ではないということは言えよう。また、「開発」は、富をもたらすことでも配分することでもなく、ただ、本来であれば発揮できるであろう能力が発揮されない状況を解消するだけのことである。しかし、それは一時的なその場しのぎの解決ではなく、その人が自らの生き方と社会の在り方を熟考し、能力を発揮する場と方法を決定できるようにするに十分なほど、将来にわたって持続できるものでなければならない。

以上のような観点から、持続可能な社会の形成という点にも考慮しながら、公民科教育における「開発」と「貧困」を取り上げた単元を開発していくこととする。

Ⅲ. 単元開発の視点

1. 持続可能な社会の形成と「開発」と「貧困」の問題

単元開発にあたっては、持続可能な社会の形成と「開発」と「貧困」の関係に関して、次の二点に留意して教材研究を進めていくこととした。

① 経済成長を目標とする「開発」は、一時的に「貧困」を解消し得ても持続可能な社会は作り得ない。

② 「開発」は、失っている機会や能力を取り戻し人が自立することを支援するもの。持続可能な社会は自立した当事者によって作られる。

すなわち、従来の大型プロジェクトを中心とする開発は、一時的な需要の増大と雇用の確保を生み出すものの、プロジェクト自体が終了するとともにそれらの恩恵ももたらされなくなり、後には維持しえなくなった巨大な建造物が残されるという結果をもたらすということが少なくなかった。そして、「貧困」の解消を目指して新たなプロジェクトが発足することが繰り返されてきたのである。このような状況は、「開発」できる土地や自然が豊富にあった時代だからこそ可能であった。今や、そのような未開の地は限られており、開発のもたらした負の遺産によって地球は極限まで疲弊している。したがって、「貧困」の解消のためには、経済成長を目指すのではなく、持続可能な社会を作り出す人材の育成に主眼をおいた「開発」が必要なのである。

そのような、「開発」は、必然的にそれぞれの社会を構成している当事者の手によって行われることと

なろう。なぜなら、その社会に住み、将来にわたってその維持や発展を支えるのは当事者以外にないからである。そのため、「開発」は、それら当事者が自らの能力が発揮できるように支援するためのものとなり、従来の先進工業国から発展途上国への資金の投下ということではなくなるのである。

以上のように、持続可能な社会という観点から「開発」と「貧困」の問題を捉えていくためには、経済第一主義の否定と、当事者主義にたつ問題解決が不可欠であると言える。

2. 教材選択の視点

本研究では、教材選択に当たっては以下の二点に留意した。

① 「貧困」に焦点を当てた教材選択

・現象としての「貧困」と、要因としての「貧困」

② 「開発」に焦点を当てた教材選択

・結果としての「開発」と、可能性としての「開発」

「貧困」に焦点を当てる場合には、現在、観察できる現象として表れている「貧困」だけではなく、様々な問題の根底にあり、本来享受できるはずの生活を人々ができていない状況の根底にある要員としての「貧困」にも注目したい。

また、「開発」については、具体的に結果として何か利益をもたらすことを目指したものだけではなく、直接的で物質的な効果は決して大きくはないが人々の将来に対する可能性を開くことを目指したものに注目していきたい。

以上のような観点から、開発単元では、「貧困」として発展途上国の問題を取り上げるだけではなく、格差社会と呼ばれるようになった日本においても同様の現象が見られないかを検討させることにする。また、「開発」については、2006年にグラミン銀行がノーベル平和賞を受賞したことにより一層注目されるようになった、マイクロファイナンスを取り上げていくことにする。

3. 授業構成

本研究においては、主に「開発」に焦点をあて、事実の解釈を重視した事実探究型の意思決定学習を目指すこととする。事実探究と意思決定は一見相いれないもののようにも見えるが、本研究では、飽くまで事実探究にとどまりながらも、事実の評価を通

して自らがどのような社会を志向するか、持続可能な社会のあり方はどのようなものかについて考察させていきたいと考えている。

「開発」と「貧困」の問題を取り上げた場合の授業構成については、以下のような3つのタイプが考えられるのではないかな。

- ① 「貧困」に焦点化した探究型の授業構成
- ② 「開発」に焦点化した意思決定型の授業構成
 - ・結果重視の事実探究型意思決定
 - ・理念重視の価値探求型意思決定

「貧困」の側からこの問題を捉えさせようとするならば、その原因や結果を探究させる授業構成が考えられよう。それに対して、「開発」の側から考えさせようとするれば、それは必然的にその「開発」の評価を含むことになる。すなわち、社会の現状や、将来どのような社会を形成していきたいかという構想に基づいて、「開発」の成果や影響を評価することが、「開発」の学習には不可欠と考えられるのである。本研究においては、「開発」の具体的な事例としてマイクロファイナンスを取り上げ、それが実際にもたらしている効果と、その結果変化した社会のあり方を検討させていくため、「開発」の結果を重視した事実探究型の意思決定学習を取り入れることとした。

4. 開発単元のねらい

本研究において開発した単元は、以下の4点をねらいとしている。

- ① 「貧困」と「開発」それぞれの概念の見直し
 - ② グローバルな「貧困」とローカルな「貧困」の関連付け
 - ③ 生活水準の向上ではなく、人間らしい生き方の追求としての「開発」
 - ④ 「開発」の背後にある社会の仕組み、システムの認識
- ①については、これまで述べてきたようにそれぞ

れの概念について従来よりも広く、そして経済的な観点にこだわらずに取り上げていくこととする。また、②に示したように、「貧困」を広い観点からとらえることで世界規模の問題と、身近に潜んでいるわが国の「貧困」の問題を関連付けることも目指したい。そのうえで、人間を育てる「開発」のあり方とそれを支える社会の仕組みやシステムの変革についても認識させることをねらいとしている。

IV. 公民科教育における「開発」と「貧困」に関する単元開発

具体的な開発単元は、後に教授書としてまとめて掲載している。

V. おわりに

開発単元は、マイクロファイナンスという従来取り上げられることのなかった教材に注目し、「開発」と「貧困」について生徒に新たな視点から捉えさせることができるものとなった。しかしながら、マイクロファイナンスは歴史学や文化人類学など多様な学問において取り上げられており、本研究で取り上げたのはその一面に過ぎない。この事象自体について多様な領域から教材研究を進めていくことが課題として明らかになったと考えている。

【参考文献】

- ・岩田正美『現代の貧困』筑摩書房、2007年。
- ・ヴァンダナ・シヴァ『緑の革命とその暴力』日本経済評論社、1997年。
- ・絵所秀紀・穂坂光彦・野上裕生『シリーズ国際開発第1巻 貧困と開発』日本評論社、2004年。
- ・菅正広『マイクロファイナンスのすすめ』東洋経済新報社、2008年。
- ・斎藤文彦編著『参加型開発—貧しい人々が主役となる開発へ向けて』日本評論社、2002年。

高等学校公民科教授書試案

1. 単元名 「貧困のない社会をどのように実現するか」

2. 単元目標 貧困とは何かということについて多様な面から考察し、社会の諸事象を貧困という観点から捉えなおすことができるようにする。そのうえで、なぜ貧困が生じるのか、その解消のためにはどのような努力がなされてきたのかを追究し、貧困の背景にある社会の仕組みやなされてきた取り組みの効果や課題を明らかにしていく。そして、最終的には、様々な状況で貧困に苦しんでいる人々を、その状況から救い出すためにどのような方法があるかについて自分なりの考えを持つことができるようにする。

3. 単元計画（全4時間）

第1時：「貧困とは何か？なぜ、貧困が生じるのか？」

貧困とはどういう状態かについて、アフリカで飢餓に苦しむ人々、ニートと言われる日本の若者、ワーキング・プアに苦しむ日本の労働者の比較しながら考えさせる。特に、貧困に苦しんでいる人々が何を失っているかを考察させることで、貧困とはたんなる所得の問題ではないことに気付かせる。

第2時：「開発は貧困を解消し得るのか？—緑の革命の功罪—」

農村開発のために1960年代に普及した「緑の革命」とは何か、その結果として貧困がどのように解消され、その一方でどのような問題が生じたかを考えさせる。「緑の革命」を手掛かりとして、従来型の開発が経済成長を目指し、ある程度の成果を収めたものの限界もあったことに気付かせ、貧困を解消し持続可能な社会を構築していくための開発とはどのようなものでなければならないかということへの課題意識を持たせる。

第3時：「開発は何のために行うのか？—モノから人へ—」

1990年代になって注目されるようになった援助の手法であるマイクロファイナンスを取り上げて、その仕組みと貧困緩和への効果を考えさせる。そのうえで、従来型の開発が経済成長を目指したものであったのに対して、新しい開発はモノよりも人の開発を重視したものであることに気付かせる。そして、そのような開発を進めていくためには従属関係を基調とするのではなく、パートナーシップに基づく国際関係が必要であることを理解させる。

第4時：「貧困をなくすためにどうすべきか？—グローバルな問題から、ローカルな問題の解決へ—」

これまでの学習をふまえて、グローバルな貧困問題を解決する国際社会のシステムがどのようなものであるかを明らかにし、そのシステムを応用して、ニートやワーキング・プアなどの国内の貧困問題を解決できるかどうかについて考えさせる。例えば、マイクロファイナンスの手法が国内にも応用できないかを検討し、そのメリットと限界に気付かせる。

4. 到達目標

(1) 概念的知識

A. 貧困の定義

- a-1. 貧困は、所得や資産などが不足し衣食住に困るという経済的状態である。(狭義の貧困)
- a-2. 貧困とは、自分らしい生き方をするための能力や自由が奪われている状態である。(広義の貧困)

B. 貧困の原因

- b-1. 貧困は、経済が縮小し資金が不足しているために生じる。(狭義の貧困の原因)
- b-2. 貧困は、経済的な要因だけではなく、政治的、社会的、文化的要因によって、自分らしく生きようとする自由が制約されることによって生じる。(広義の貧困の原因)

C. 開発の目的

- c-1. 開発とは経済成長を促すことであり、そのためには経済活動を活発にするために資金を供給し道路、鉄道、港湾等の社会基盤を整備する必要がある。(開発に関する古いパラダイム)
- c-2. 開発は、貧困に苦しんでいる人々の生活改善を目標としており、そのためには、その人々が自分らしく活動できる環境を整える必要があり、活動を制約している経済的、政治的、社会的、文化的要因を取り除かなければならない。(開発に関する新しいパラダイム)

D. 開発の方法

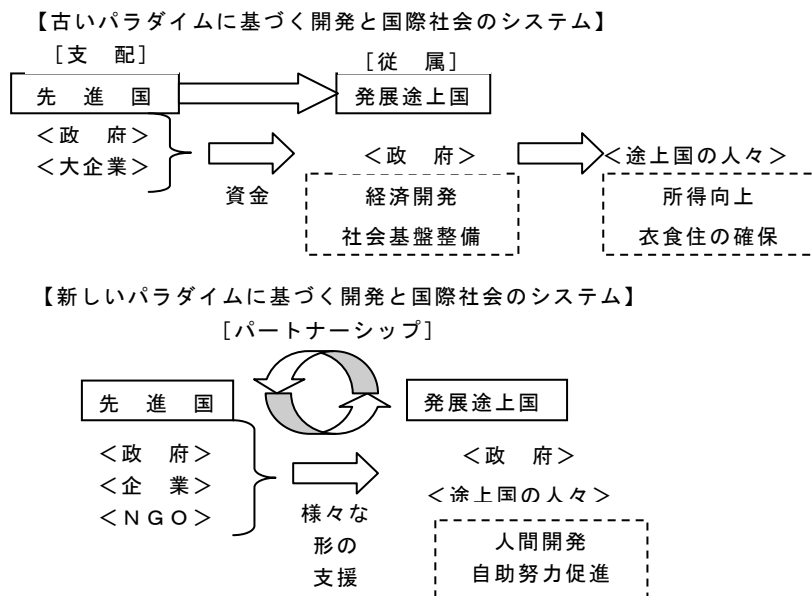
- d-1. 経済成長を促すために、開発は、あらかじめ決定した目標に向けて政府等を中心に、支援する先進国と援助される発展途上国との関係の中で計画的に進められる。(古いパラダイムに基づく開発の方法)
- d-2. 生活改善を目指して、開発は、途上国の人々が主体となって自己実現を妨げている制約を取り除くことを支援するように進められる。支援の形は支援する側と支援を受ける側が対等に話し合って決定される。(新しいパラダイムに基づく開発の方法)

E. 開発の背景となる(国際)社会のシステム

- e-1. 古いパラダイムに基づく開発論は、援助する側(先進国)に援助を受ける側(発展途上国)が従属する関係性に基づいている。

e-2. 新しいパラダイムに基づく開発論は、援助する側（先進国）と援助を受ける側（発展途上国）はたがいに平等で、パートナーシップに基づく関係にあると考える。

(2) 概念構造図



5. 単元の展開

第1時：「貧困とは何か？なぜ、貧困が生じるのか？」

過程	教師の指示・発問	教授学習過程	資料	生徒に獲得させたい知識
導入 【様々な貧困】	○貧困とはどのような状態を意味しているだろうか。 ○今の社会でどのような人が貧困に苦しんでいるだろうか。 ○次にあげる人々は、貧困に苦しんでいる人々であるが、それぞれどのような状況かを説明しなさい。 ①アフリカのジンバブエで貧困に苦しんでいる女性。 ②いわゆる「ワーキング・プア」と言われる状況にある、日本の男性。 ③いわゆる「ニート」と言われる日本の若者。 ○貧困といっても状況や程度は様々である。貧困とはどのような状況を意味しているのだろうか。 ○なぜ、貧困に苦しむ人がいるのか。貧困を解消するためにはどうすればよいのだろうか。	T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：発問する P：予想する	(1) (2) (3)	・生活が苦しいこと、収入が少ないこと等。 ・失業している人、生活保護を受けている人、発展途上国の人等。 ①：干ばつにより食料が無くなる一方で多くの子どもを抱えている。子どもも母親も生命の危機にさらされており、夫はそのような妻を捨てていなくなった。 ②：30代のホームレスの男性。派遣で様々な仕事をしており、カプセルホテルに寝泊まりしている。実家は生活保護を受けており、頼ることはできない。 ③：働く自信がなくてなかなか就職活動に取り組めない20代の男性。アルバイトによって生活をしている。 ・収入がないこと、働くことができないこと等。 ・生活保護を充実させればよい、アフリカで飢餓に苦しんでいる人には援助を増やせばよい、景気を良くして就職できるようにすればよい等。
展開 【貧困の定義と原因】	○収入がないことが問題だとすれば、金銭的な支援をすれば問題は解決するだろうか。 ○貧困とは何か。先に挙げた人々に欠如しているものは、収入だけだろうか。また、それらが欠如しているのはなぜか、資料を読み考えなさい。	T：発問する P：答える T：発問する P：答える	(4) (5) (6)	・ある程度は解決するのではないか、収入だけの問題ではないのではないか。 ①：衣食住全てが欠如している。さらに、権利や自由もない。干ばつなどの自然現象だけが原因ではなく、エイズなどの病気、内戦などの政治的不安定が原因として考えられる。

	○貧困といっても、その程度、状況、原因は大きく異なっている。共通しているものは何か。	T：発問する P：答える	②：①の女性ほどではないが、衣食住が欠如している。職がない。景気後退による失業や就業条件の悪化の他に、生活費の増大、多重債務などもワーキング・プアを生み出す原因となる。 ③：衣食住については、現時点では欠如しているとは言えないが、このままの状態が続けばやがては不足すると考えられる。職、希望、将来への見通しが無い。1990年代以降、若年層の就職が難しくなったこと、家庭や学校の中で自己実現をしてくるものの意義や方法を見出せなくなっていることが原因の一つ。 ・自分の望むような生き方ができないこと、自分の好きなことができないこと、自分の能力を発揮できないこと等。
終結【今回の課題】	○貧困をどのように定義すればよいだろうか。 ○貧困を解消するためには、金銭的な支援をすれば十分だろうか。 ○先に挙げた三者の中で、最も早い解決を必要とするのは誰か。 ○まずは、発展途上国の貧困問題について解決の方策を考えてみよう。	T：説明する。 T：説明する。 T：発問する P：答える T：説明する	・貧困は狭義には、所得や資産などが不足し衣食住に困るという経済的状態であるが、もっと広くとらえることができる。その場合は、自分らしい生き方をするための能力や自由が奪われている状態を意味する。 ・貧困は、経済が縮小し資金が不足しているために生じるだけでなく、政治的、社会的、文化的要因によって、自分らしく生きようとする自由が制約されることによって生じる。 ・アフリカで飢餓に苦しむ女性。 ・次の課題。

〔配布資料〕

- (1)：新聞記事等
- (2)：岩田正美『現代の貧困』筑摩書房、2007年、pp.14－16を参考に作成。
- (3)：玄田有史・曲沼美恵『ニートフリーターでもなく失業者でもなく』幻冬舎、2004年、pp.57－75を参考に作成。
- (4)：新聞記事等
- (5)：岩田正美前掲書第5章「不利な人々」pp.138－164を参考に作成。
- (6)：玄田有史・曲沼美恵第6章「誰もがニートになるかもしれない」pp.234－268を参考に作成。

第2時：「開発は貧困を解消し得るのか？—緑の革命の功罪—」

過程	教師の指示・発問	教授学習過程	資料	生徒に獲得させたい知識
導入【前時の確認】	○前時の①の貧困の問題を解消するためには、どのような方法が考えられるか。 ○「緑の革命」とはどのような援助であったか、資料から読み取りなさい。	T：発問する P：答える T：発問する P：答える	(1)	・食料を送ったり、経済援助をする等。 ・1960年代以降に東南アジアや南アジアを中心に急速に普及した農業の改善。先進国で成功をおさめていた高収量品種の導入と化学肥料の大量投入という農業技術の進歩を、発展途上国に適用したもの。これらの援助と同時に、灌漑設備の整備、病害虫の防除技術の向上、農作業の機械化がなされ、農業生産が大きく改善された。
展開【緑の革命の功罪】	◎「緑の革命」後も、貧困の問題は解決していない。「緑の革命」は失敗だったのか、なぜ、「緑の革命」は貧困を解消できなかったのか。 ○「緑の革命」が失敗だったと言われるのはなぜか。資料を読みまとめなさい。	T：発問する P：予想する T：発問する P：答える	(2) (3) (4)	・生産が増えても発展途上国の人々の手に入らなかった、長続きしなかった等。 ・化学肥料の大量投入を必要とするため、化学肥料の消費を増大させた。その結果、土壌が変化し毒性をもつようになった。しばらくは大豊作が続いたものの、不作為が報告される場所も見られるようになった。

	○「緑の革命」は、全くの失敗だったのか。 評価できるところはないのか。 ○「緑の革命」は、効果と限界についてまとめなさい。 ○貧困解消策としての「緑の革命」の問題点は何か。	T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：説明する	また、単一種の米や麦を栽培することは生態系に大きな変化をもたらした。結果として病気、土壌の劣化、水害、さらには他の農作物の生産の減少がもたらされた。 さらに、高収量品種の種子はアメリカの巨大企業が支配しており、結果的にそのような企業や先進国への発展途上国の従属を強めることになった。 ・「緑の革命」により穀物生産は増えた。そのため食料増産が食料価格の高騰を抑制した。また、農村経済が活性化され雇用機会や所得を増大させた。穀物価格の低下は、実質的に貧困解消を促進した。 ・「緑の革命」は、農業生産を増やし食料価格を低下させたり、農村経済は活性化したりすることで貧困の解消に貢献した。しかし、生態系の変化をはじめとする自然環境の悪化や、先進国への従属を強めるといった社会環境の変化をもたらした。このことは発展途上国の人々の生活の向上にはつながらなかった。 ・食料の不足という危機は回避させ、経済成長をもたらすものの、その後永続的に発展途上国の人々が自立して成長し続けるための基盤は形成しなかった。
終結 【従来の開発の課題】	○「緑の革命」をはじめとする経済成長を目標とする開発は、貧困をどのようにとらえていると言えるか。 ○経済成長を目標とする開発の特徴と問題点をまとめなさい。 ○貧困の定義を考えると、開発はどのようなものでなければならないか。	T：発問する P：答える T：発問する P：答える T：説明する	・資金が不足しているという狭義の貧困概念に基づいている。 ・開発とは経済成長を促すことであるという前提で進められる。そして、あらかじめ決定した目標に向けて政府等を中心に、支援する先進国と援助される発展途上国との関係の中で計画的になされる。そのためには経済活動を活発にするために資金を供給し道路、鉄道、港湾等の社会基盤を整備していく。 ・ある程度の経済成長を遂げた後に、発展途上国の人々が自立して成長できるようにならない。そのためには、あらかじめ定められた目標の達成を目指すのではなく、発展途上国の人々が自身で目標を考え、その達成に向けて働きかけることを支援するような形が求められる。

【配布資料】

- (1)：「緑の革命」ウィキペディアを参考に作成。
- (2)：「緑の革命と化学肥料の生産、輸入、消費」ヴァンダナ・シヴァ『緑の革命とその暴力』日本経済評論社、1997年、pp.101－118を参考に作成。
- (3)：「緑の革命の生態系への影響」ヴァンダナ・シヴァ前掲書、pp.207－218を参考に作成。
- (4)：「緑の革命が生み出す従属関係」ヴァンダナ・シヴァ前掲書、pp.218－236を参考に作成。
- (5)：「緑の革命の功績」絵所秀紀・穂坂光彦・野上裕生『シリーズ国際開発第1巻 貧困と開発』日本評論社、2004年、pp.62－64及びその他資料を参考に作成。

第3時：「開発は何のために行うのか？—モノから人へ—」

過程	教師の指示・発問	教授学習過程	資料	生徒に獲得させたい知識
導入【マイクロファイナンスの概要】	○発展途上国の人々が自立して成長することを支援するための方法には、どのようなものが考えられるだろうか。 ○マイクロファイナンスとは何か、どのような援助なのか資料から読み取らなさい。	T：発問する P：答える T：発問する P：答える	(1)	・教育支援をし能力を身に付けさせる、継続的に資金を貸し出す等。 ・1983年にバングラデシュの大学で経済学を教えるユヌス教授によって設立されたグラミン銀行は、代表的なマイクロファイナンスである。グラミン銀行は、担保をもたない貧困層

				にお金を貸し出す。通常の銀行が融資対象としない貧困層,特に女性に焦点を当てている。たんに、金を貸し出すだけではなく、地域に密着して生活や事業についてサポートする。グループに貸し出すことによって返済率を高め、その率は90%以上である。政府も出資している。
展開 【マイクロファイナンスの効果と限界】	◎従来の金融の常識では考えられないマイクロファイナンスがなぜ成功したのか。 ○マイクロファイナンスと一般の金融機関との違いは何か。 ○マイクロファイナンスはどのような効果をもたらしてくれているか。資料から読み取りなさい。 ○マイクロファイナンスが、破たんしないのはなぜか。 ○マイクロファイナンスに限界はあるか。 ○マイクロファイナンスのような取り組みは、従来の開発と何が異なっているのか。	T：発問する P：予想する T：説明する T：発問する P：答える T：説明する T：説明する T：説明する P：答える T：説明する	(2)	- どうしても返済しなければならないような仕組みを作っている、政府が出資している等。 - 貧困層に貸し出し、貧困の削減を目的としていること。そのため、借り手の生活や事業支援まで行い信頼関係を構築する。小規模の融資を無担保で行い、収入を生み出す活動や事業を促進する。 - ジンバブエの農村部で形成されている貯蓄クラブは、近隣住民で組織され毎週行われる集会で貯蓄を集めている。NGOの支援を受けて融資もできるようになり、その結果、融資を受けたものが所得を増やしたり、貯蓄をして不慮の事態へも対応できるようになったり、資産を形成したりするなどの効果がもたらされた。また、集会を通して情報交換やリーダーの育成も行われるようになった。 - 地域に密着し、地縁や血縁等のネットワークに基づいているために、返済への意識が高められている。また、地域のニーズに合った運営がなされていることも重要。 - 融資が返済されることが大前提であるために、もっとも下層の極貧層を救済するには限界がある。また、小口融資のために、新規に事業を立ち上げるための資金としては少ない。 - 援助を受ける側の主体性を重んじている。目標自体は、援助を受ける側が自らのニーズに合わせて設定する。
終結 【新しい開発のあり方】	○マイクロファイナンスの取り組みの前提にある、貧困に対する見方はどのようなものか。 ○マイクロファイナンスが示唆するこれからの新しい開発のあり方をまとめなさい。 ○マイクロファイナンスは、日本国内の貧困問題の解決策にもなり得るか。	T：発問する P：答える T：説明する T：発問する P：答える		- 貧困は、自己実現の能力や機会が奪われている状態であると捉えられている。 - 開発は、貧困に苦しんでいる人々の生活改善を目標としており、そのためには、その人々が自分らしく活動できる環境を整える必要があり、活動を制約している経済的、政治的、社会的、文化的要因を取り除かなければならない。生活改善を目指して、開発は、途上国の人々が主体となって自己実現を妨げている制約を取り除くことを支援するように進められる。支援の形は支援する側と支援を受ける側が対等に話し合って決定される。 - 期待できるのではないか。

〔配布資料〕

- (1)：「バングラデシュのグラミン銀行」菅正広『マイクロファイナンスのすすめ』東洋経済新報社、2008年、pp.19－24を参考に作成。
- (2)：「ジンバブエにおける貯蓄クラブの活動」斎藤文彦編著『参加型開発—貧しい人々が主役となる開発へ向けて』日本評論社、2002年、pp.117－121を参考に作成。

第4時：「貧困をなくすためにどうすべきか？ーグローバルな問題から、ローカルな問題の解決へー」

過程	教師の指示・発問	教授学習過程	資料	生徒に獲得させたい知識
導入 【二つの開発論の応用】	○これまでの学習をふまえて、次の二つの事例についてその成否が分かれた理由を説明してみよう。 ①：インドにおけるダム建設 ②：ブルキナファソにおける農村開発	T：発問する P：答える	(1) (2)	・①バーグラダムは1963年に長い用水路を抱える灌漑システムをもった大型ダムとして使用が開始された。しかし、建設による環境の変化等によって地域によっては水不足を生じさせる結果となり、さらには大規模な洪水をもたらすことにもなった。 ②ブルキナファソにおけるナームというNGOは、地域住民の団結を生み成功している。農業の生産性を向上させたり、職業訓練や識字教育にも大きな効果をもたらしている。農地の改善なども進んでいるが、これらの活動は地域の人々が集まり組合を作り、草の根から拡大した住民主導のものであった。 ①は、大規模開発をトップダウンに進めた結果であり、②は、ボトムアップに住民主導で進めたものである。後者の方が地域のニーズに合っており、地域のつながりを生むことでその後の自立を促している。
展開 【日本国内の貧困解消政策の考案】	◎これまで学習した二つの開発論は、どのような社会システムに基づくものだろうか。先進国、発展途上国、それぞれの政府、企業、人々の関係を図式化しなさい。 ○従来の開発論と新しい開発論では、先進国と発展途上国の関係はどのように違っているだろうか。 ◎新しい開発論の背景にある社会システムは、日本国内の貧困問題の解決に示唆を与えてくれないだろうか。 ○マイクロファイナンスは日本国内にも導入できないだろうか。導入すれば、国内の貧困の問題を解消できるだろうか。	T：発問する P：答える T：説明する T：発問する P：答える T：発問する P：答える		・到達目標の(2)概念構造図。 ・従来の開発論は二つの関係を支配と従属としてとらえていた。それに対して、新しい開発論はパートナーシップととらえている。 ・援助をするもの、援助を受けるものという関係ではなく、援助を受ける側が自立できるように、受ける側に寄り添った関係に基づく対策が必要である。 ・法整備を進め、政府や地方自治体などが支援をすれば導入できるのではないか。貧困を完全に解消することはできないかもしれないが、削減には有効であると思われる。
終結	○ワーキング・プアやニートといった国内の貧困問題を解決する自分なりの対策を考えてみよう。また、現在の日本国内でなされている諸政策を評価してみよう。	T：発問する P：答える		・主体性の尊重、自立支援、能力開発などの原理に基づく対策が有効であると思われる。一方、一次的な資金の投資は、長期的には効果が薄いと推察される。

〔配布資料〕

- (1)：「大型ダムと政治権力」ヴァンダナ・シヴァ『緑の革命とその暴力』日本経済評論社、1997年、pp.142－151を参考に作成。
 (2)：「ブルキナファソの農村開発」斎藤文彦編著『参加型開発―貧しい人々が主役となる開発へ向けて』日本評論社、2002年、pp.92－97を参考に作成。

英文表題：Developing a tentative teaching plan for Civics focused on a sustainable society to teach about “Development” and “Poverty”

著者：Toshinori KUWABARA；Division of Social Studies and Language Education, Graduate School of Education, Okayama University

キーワード：Civics, Developing a tentative teaching plan, a sustainable society, Development, Poverty